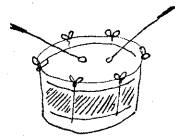


光の中に大人たちもいる

——独断的発達についての覚書——



大野松雄

はじめにお話ししておきたいこと

私は幼児教育、保育の専門家ではありません。また障害児教育の専門家でもありません。本職は、電子音楽などをつくっている、音響デザイナーです。ただ、人類の進化、

特に人類が何故直立二足歩行をするようになったのか、何故言語を獲得するようになったかに興味をもち、たまたま八年程前から、何人かの障害を持っている子どもたちと「つきあい」をすることになり、また、これもたまたま三年前前から、大津市の障害児保育の現場で、障害を持っていてる子ども、持っていない子どもたちと「つきあい」をすることになってしまった大人です。そしてつきあいの中

で、『光の中に子どもたちがいる』という記録映画——と

いうより、映像と音響によるレポート——をつくることになってしまった一人の大人です。この記録は、一人の障害を持つている子どもが、大津市の公立保育園に入り、一年の間にどのように変っていくか、そしてその子どもとかわる他の子ども——いわゆる「健常児」たちもどう変わっていくか、さらに、その変り合いの中で私を含めた「大人」も、どう変っていくか……を記録したものです。

私は今この作品を、子どもたちと育ち合う記録——と勝手に名づけています。私は、子どもたちから沢山のことを教わり、いろいろなことを私なりに発見したと思います。子どもの発達について、子どもたち相互のつきあい方について、大人と子どもとのかかわりについて……とくに大人

と子どものかかりについての面で、私は大変貴重な発見をしたと確信しています。そしてそのことは、いわゆる「専門家」の人たちには、意外に見逃ごされている面があると思われるのです。しかし、この事実の中に、子どもの発達についての「何か」があると考えられるのです。私は『光の中に子どもたちがいる』を通して学んだことを、これからお話ししようと思いますが、門外漢の私の話なので、多分に独断的なことになると思います。「専門家」のみなさんの御意見、御批判を受けたいと考えています。本題に入る前に、私が何故いろいろな子どもたちと、かわりを持つようになったかを、簡単に説明しておきたいと思います。

心の負債を背負ってしまったこと

子どもたちのきびしさをやさしさ

約八年前『夜明け前の子どもたち』という記録映画が製作されました。これは滋賀県にあるびわこ学園という、重症心身障害児の施設の療育記録映画で、私は音響スタッフとして参加していました。私たちは、「療育に映画が参加した」とか格好をつけて、また相当に気負って製作をしてい

ました。いよいよ編集も大詰めに近づき、私は録音機をかっいで、子どもたちのインタビュをとりました。子どもたちはみんな、大なり小なり言語障害をもち、車椅子に坐る時以外は、寝たままではいなければなりません。聞きとりにくい話のやりとりの中で、私は次第に呆然とせざるをえない状態になってしまったのです。子どもの口から出てきたことは、ベトナム戦争批判、万国博批判、全国の施設の子どもたちとの連帯……これらが、十歳前後の子どもたち、それも障害をもっているために、学校へ行きたくてもそれを免除させられてしまった子どもたちの声だったので。話はさらに、現場の職員がやめていく問題——当時から、すでに腰痛などで職員の多くがやめていきました。せっかく慣れた職員がやめる、新しい人と変る。子どもにとって、これはいろいろな面で、大変苦痛を伴うことなのです。でも、驚いたことに、子どもたちの言葉の中には、批判めいた響きはなく、むしろ、やさしい、いたわりの気持ちを感じられたのです。この「日本」の現状に対するきびしさ、職員の現実に対するやさしさ……この現実を見すえた確かな視点を、まだ十歳にもならない子どもたち、それも障害児であるために、教育を受けられない子どもたちが

持っていたのです。私たちスタッフは、療育に映画が参加したとか何とか、結構弊がって一年間も現場にいたくせに、子どもたちの確かな眼について全く無知であったのです。さらに、現場の職員の大部分も、この事実には気づいていなかったのです。私たち大人は、えらそうなことをいうくせに、何故この事実が判らなかつたのだらう。私たちは——現場の職員も含めた私たち大人は、その事実には無知のまま、映画を製作してしまつたのです。このことは、私にとって、子どもたちへの心の負債として、私の中に長く残ることになってしまいました。

光の中の子どもたちとの出会い

子どもの発達とは何だらう

一九七三年、滋賀県大津市は全国の自治体に先がけて、障害児の幼稚園、保育園への全入制度を実施しました。いわゆる「障害児保育」が制度化されたわけです。そしてその記録映画『保育元年』が、大津市によって企画され、私もその製作に参加しました。私は、びわこ学園の子どもたちから借りた「心の負債」が、これで多少なりと返済できると思いました。しかし結果はその逆で、新しく出会っ

た子どもたちから、負債の上のせをさせられたような気持ちになつてしまつたのです。

よくよく考えてみると、子どもたちは単なる被写体、象物として扱われたに過ぎないのではないか。（もちろん、大津市も私たちは精一杯やつたつもりですが……）結局、大人たちが大人たちのために作つた……そんな気がしてきつたのです。これではやはり子どもたちの「心」を知ることができない。子どもたちの「心」を知るために、「心」の発達を記録してみよう。『光の中に子どもたちがいる』の記録は、こうして始まりました。

発達とは空間的有機的なものであること

デジタル的なものからアナログ的なものへ

前にも申しましたように、この記録は一人の障害を持つ子ども——カズエちゃんを中心に、保育園の仲間たちとのかわりを、一年間追つたものです。では、カズエちゃんの変化の主なもの、時間の経過に従つて書いてみましょう。一九七四年四月初旬、カズエちゃんとの初めての出会い。当時三歳十か月、前年の十二月迄歩くことが出来ず、まだ話し言葉はありません。障害の原因は、一時脳性マヒ

ではないかといわれましたが、一応不明ということになっていました。ただ、大変ふとっていてその時二十九・五キログラム。初めて会った時の感じは、愛想はいいが、まだ動作はにぶく表情の変化もあまりありません。でも、向けたマイクに一回だけですが反応を示したこと、そして、食事の後のけじめ——皿を重ねる、手を合わせてゴチソーサマをする——がついているのが印象に残りました。

五月一日、カズエちゃんが一月おくれで、保育園に入園する日です。ようやく歩き始めたばかりのカズエちゃんは、お母さんに手をひかれて歩きますが、歩道程度の段差の上り降りも、相当のエネルギーを使います。少しの歩行でもう足が開き、まだ指さしが出来ません。友だちとの最初の出会い。おたがいにとまどっているようです。カズエちゃんは、相手にさわってたしかめています。子どもたちは、カズエちゃんが寄ると、わっと逃げます。でも逃げたままではなく、直ぐにまわりを囲みます。一人の子どもがちょっと押すと、足の弱いカズエちゃんは、どすんと尻もち。先生は、先ず子どもに起こさせます。遊戯が始まっても、まだみんなのリズムに入っていないけません。大体一時間半位であぎがきます。しかし親子教室などですでに学習し

て、自分の興味のあるもの——むすんでひらいての手を叩くところ、オルガンの音色等——には反応を示し、また、新しい世界をあちこち「探検」していました。

六月中旬、カズエちゃんはお母さんの手をはなれて、一人で歩きます。歩くためのエネルギー消費が減ると、「ゆとり」が出て盛んに道草をします。情報の入力が増大しています。ちゃんと指さしが出来ます。そして、保育園の門迄くると、小走りにみんなの所へ走っていきます。カズエちゃんは、新しい世界が気に入ったようです。遊戯でも、先生や友だちを観察してついでいこうとします。この頃になると、自然なかたちでカズエちゃんをサポートしてくれる。「友だち」が現れます。遊戯では、大分走れるようになり足の力がついたカズエちゃん、まだ腕の力、指の力が弱く、ブランコは無理のようです。スベリ台に興味をしめしても、段を登ることが出来ません。その興味を、すべり台の下り口に坐り込む、逆に登ろうとするルール違反で表現しようとしています。ルール違反を友だちに止められると、自分のおなかを叩いて泣きます。またすべり台に登れない口惜しさを、先生に抱きついて泣くことであらわそうとします。歩けるようになった自信と、新しい世界への興味が

ゆとりと好奇心を生み、道草、他人の観察、友だちのサボ
ート、ルール違反を止められる……等から、情報量は着実に増大しています。また、すべり台ですべりたい気持ち
を、別の形で表現する。先生に抱きついて泣く——等の情
報入力に対する出力、つまりフ、ィ、ド、バ、ックの芽生えが見
られます。

七月上旬、まだ梅雨時。雨にぬれてカズエちゃんは歩き
ます。保育園の門をくぐると、その顔はニコッとほころび
ます。みんなの真似をして紙を折ろうとします。先生に叱
られて、床を叩いて泣きます。友だちの粘土をとりあげる
など、いたずらをするようになり、でも最後はちゃんと返
します。何か仕上げると、嬉しそうに手を叩いて喜びま
す。食事の時も、みんなで「イタダキマス」という迄、待
つことが出来るようになります。しかし、フーと吹く息の
方は、まだ出来ないようです。カズエちゃんは、園での生
活が次第に自分のものになりつつあるようです。感情表現
も豊かになり、前は自分のおなかを叩いて泣いたのが、こ
の頃は床を力一杯叩いて泣く——感情を表に向ける——ア
ウトプットの回線がつながります。こうして、いたずらを
する、取りあげて返すという、友だちの間での、フ、ィ、ド、バ、

ックの關係が成立し始めます。そして床を力一杯叩く、粘
土をべたべた叩くという一連の行為が、次第に腕から指に
かけての力をたくわえていくようです。また、半日保育で
あったのが、昼寝を入れての全日保育に切り変わったことで、
エネルギーの発散、蓄積、発散のバランスが、うまくとれ
てきたようです。

七月下旬、初めてプールに入って友だちと水のかけっ
こ、色水遊びというボディペインティングごっこで、体に
絵具を塗ったり塗られたり。つまり、フ、ィ、ド、バ、ックの關
係が定着します。ブランコも先生にのせてもらいます。そ
して、これも先生に助けられませんが、とうとうすべ
り台に登り、すべり降ります。

八月上旬、びわ湖の湖水浴で、カズエちゃんは昼のおべ
んとうの残りを、紙で包みます。浮輪につかまり、体を斜
めにかたむけた姿勢で、足で水を力一杯かきます。

そして八月下旬、カズエちゃんは遂に、「バブバブバブ、
ジャブジャブジャブ」等、話し言葉の前段階に達します。
入園して四か月間、カズエちゃんの変化を見ると、
子どもの発達とは、決して直線的・平面的なものではなく、
もっと空間的・有機的なものだと思います。何か一つのこ

との完成——それがたとえ僅かなことでも——が、ゆとりと自信を生みだし、それは情報量の増大をもたらします。

その増大が情報の出力をうながす時、友だちのフィードバックの関係が成立します。私はカズエちゃんの変化を見て、このフィードバックの関係の成立が、大変重要なのではないかと思いました。何故ならこれらのことは、「心」

だけでなくむしろ「心」の発達は、体全体の発達の中での相関々係——つまりフィードバック——が、外部とフィードバックする間で、さらにフィードバックを起こす——何だか大変ややこしい言いまわしになりましたが……だから私は、子どもの発達とはより空間的、有機的なもの、言葉を変えて言えば、デジタルなものでなくアナログ的なものではないか、と考えるのです。

ヨコのフィードバックからヨコナタテの

フィードバックへ

カズエちゃんは四か月の間に、友だちと相互のフィードバック、つまりヨコのフィードバックは成立する迄になりましたが、まだ先生など、大人へのアプローチ、つまりタテのフィードバックは成立していませんでした。これで

は、発達の空間としては不完全です。カズエちゃんと大人との関係は秋から始まります。しかし残りの紙数があまりないので、いささかハシヨットお話しいたします。

秋に入ってカズエちゃんの足は、ますます丈夫になり裏山への園外散歩も、ちゃんと歩いて登りきります。言葉らしきものも大分増えてきます。十月初めになると、体操などで自分の能力的弱点を予知して、カズエちゃんの方から、先生に助けてもらいにいくようになります。大人へのアプローチの始まり、タテのフィードバックが芽生えます。いたずらも、すきを見つけて人のものをさっと取り上げる——判断と行動のバランスがすっかり身についてきます。時には度が過ぎて、友だちにヒツパカれます。カズエちゃんは泣きながら先生に訴えにいきますが、その原因がカズエちゃんにあることを、逆にたしなめられます。ここではヨコとタテのフィードバックが、それぞれ作用し合っています。大人へのアプローチは、十二月に入ると、先生がやっている雑巾がけを自発的に手伝う、そして雑巾のしぼり方や拭き方を教わるといふ所迄発展します。いたずらも、十二月中旬を過ぎると、止められることを期待して、わざと……遊びの気持ちがあられ、また、人のすきを見

つけてのいたずらは、年が開けると椅子をさっと引いて、尻もちをつかせる迄になります。この一連の行為は、いたずらというより、「ためす」という感じになっています。話は前後しますが、ブランコは十一月に入ると、一回か二回自力でこげるようになります。その頃になると、遊戯は何とかがついでいけるようになり、「つもり」の行動が出てきます。たとえばスキップ。カズエちゃんは大変ふとっている割に足首が細いので、飛ぶことは苦手、まだスキップはちゃんと出来ません。でもスキップをしているつもりで、リズムに合わせてみんなの前で動きます。そして区切りがくると席に戻ります。自分の限界一杯に、遊戯のリズムとみんなのリズムに合わせ、表現しようと努力しています。年が開けると、カズエちゃんの大人へのアプローチは、先生ばかりでなく私たちスタッフにも向けられます。カメラマンが撮影していると寄ってきて、レンズをじつとのぞき込みます。撮影を続けながらカメラマンが、「ヨイ・ドーン」というと、くるりと向きを変えて走り出し、ある所迄いくとまた走って戻り、再びレンズをのぞき込みます。ブランコは、二月に入ってとうとうこげるようになり、三月になるといろいろ向きを変えて、工夫しながらやる迄にな

ります。そして三月中旬、風邪をひいて休んだというので、お見舞いにいった私たちスタッフの前で、遂に「ドッコイチョ」と言いました。

カズエちゃんが一言喋る迄の一年間、カズエちゃんはそのごく沢山の物を見、音を聞き、物にふれ、人に接します。何度もくり返すようですが、情報量の増大、自身のフィードバック、友だちとの、大人との、そしてヨコタテのフィードバック、さらに、それぞれが相互にフィードバックし合う中で、量的に蓄積されたものが質的变化をとげる……カズエちゃんの「ドッコイチョ」の中にそれを感じ、人類進化の長い営みを感じました。大分前になりますが、今西錦司さんの本に、「人類進化の中で、直立二足歩行と言語の問題は、立つべくして二本足で立ったのであり、話すべくして話すようになった……」とあったのを読んだ記憶があります。その時は、その意味がさっぱり判りませんでした。カズエちゃんの「一言」を聞いて以来、おぼろげながら判るような気がします。

子供と大人との関係について
もう一つのタテとヨコの関係

紙数ありませんが、もう一つふれておきたいことがあります。

それは初めにお話した、子どもの「心」を知る問題です。「専門家」の方々にとっては当り前のことかも知れませんが、これは、私と子どもたちとのかわりの出発点でもあるので、私なりの考えを簡単にまとめてみます。

結論から先に申しますと、私たち大人は、とかく「大人」として、タテの関係のみで、子どもたちと接しているのではないだろうか。「大人」が子どもたちと友だちとして、つきあうという、ヨコのつきあい方も必要なのではないでしょうか。もちろん、「大人」としての経験や社会ルール等を伝えていく、というタテの接し方も必要です。しかし、それもヨコのつきあい方がなされていなければ、子どもたちによりよく伝わらないのではないかと思われれます。ヨコの関係の中で、子どもたちは「心」を大人に向けて開いてくれる——そんな気がします。

私の貧しい経験でいうならば、カズエちゃんの初めての言葉、「ドッコイチョ」は、私の前で出てきたものです。

これは、私とカズエちゃんとの友だち関係の中で出てきたと思われれます。実は私は、この記録を続ける中で、なんとかカズエちゃんと友だちになれないか、と考えていまし

た。そして以前、びわこ学園の子ども——脳性マヒとちえ

おくれを伴っている、いわゆる重症心身障害児——たちに試みたことを思い出しました。みんな話し言葉はありませんが、よく唇を合わせて「ブー」とか「ブルブル」とやっているのを見て、何となく眼を同じ高さに合わせて、その真似をしてみました。すると、大変喜んで反応するので、真似をして遊んだことがあります。子どもは大人の真似をして、いろいろなことを覚えていく。「大人」が子ども、真似をする、とどうなのだろう。八月のびわ湖の湖水浴の夕方、カズエちゃんの「しぐさ」の真似をしてみました。はたして、カズエちゃんの反応は大変なものでした。キャッキャと喜んで、いろいろな「しぐさ」をします。それは私は直ちに真似をします——眼を合わせ、なるべく姿勢を低くして……そのうちに、カズエちゃんは私のタイミングを外そうとしますので。私はこの時、カズエちゃんにつきあえたと思いました。

二度目は、九月の遠足の時。昼のおべんとうの後、カズエちゃんはそれ迄しゃぶっていたペロペロキャンデーを、私の方に差し出しました。私はそれを口に入れてしゃぶり、再び返すと喜びようはものすごく、そのあと何回か、

私とカズエちゃんの口の間を、ペロペロキャンデーが往復しました。

三度目が例の「ドッコイチョ」になるわけです。丁度この頃、カズエちゃんの大人へのアプローチは先生だけだけでなく、私たちスタッフにも向け始めた時でした。風邪もすっかりよくなって、弟と一緒に隣の家のガレージで遊んでいました。私たち「大人」が遊びにいったことが、カズエちゃんには思いがけない喜びだったようです。ごあいさつのと、私は早速カズエちゃんの声を真似しました。しばらくやりとりがあつて、カズエちゃんがしゃがもうとした時、私は思わず「どっこいしょ」と言いました。するとカズエちゃんは「ドッコイチョ」と答えてくれたのです。私とカズエちゃんは、この三つの段階をふんで友だちづきあいをするようになった……というわけです。

子どもたちは自身で光り輝いている

「大人」も光の中へ入れてもらおう

『光の中に子どもたちがいる』を記録する中で、私はたくさんのお話を教わりました。そして「子どもたちと育ち合う」ということが、実感として判つたような気がしま

す。完成後、多くの御意見や御批判を頂きました。その中に気になるものがいくつもあります。その一つに「光の中……」の光源についてのものです。私は、光源は子どもたち自身と考えています。障害を持つ子が持つまいが、子どもたちはみんな「光」です。子どもたちは自身の光で輝き合っているのです。ところが、恵まれない子に、大人たちが光を当ててやらねば……という考え方が、意外に多いのです。「大人」たちは、少しうぬぼれが強すぎるようです。「大人」たちが子どもたちにしてやれることは、みんながもっと輝くよう手助けをする……精々その程度のことではないでしょうか。私たち「大人」は、子どもたちを「指導」したり「教え」たりする前に、まず子どもたちと友だちになりましょう。「大人」たちと「子ども」たちが、タテとヨコの関係で結ばれた時、相互のフィードバック作用は、きっと「大人」たちを「発達」させるでしょう。その時「大人」たちは、初めて「子ども」たちに照らされるにぶく輝くでしょう。惑星が恒星のおかげで光るように……。そして「光の中に大人たちもいる」状態が出現し、子どもたちはやっと安心して、光をうたい続けられるでしょう。

(映画製作者・総合企画)